

## あいさつ（2011/9/25・第11回神奈川支部証言集会主催者あいさつ）

本日は、おおぜいの皆さんの参加を頂きまして、本当にありがとうございます。

本日、絵鳩さんにお話しして頂く内容は、じつは3月12日と13日に連続した証言集会を計画していきまして、その3月13日の証言集会で絵鳩さんにお話しして頂く予定でした。すでに絵鳩さんも90分間お話しする内容をしっかりと吟味して、十分な準備が整っていたのでした。

皆さんご存じのように、この2日連続の証言集会の前日が3月11日なのです。あのような大震災に遭遇したのです。

会場である、この県民センターが閉鎖されて急きょ中止となりました。集会中止の決定をメールで連絡できるところへはできるだけ中止の連絡をしたつもりではありますが、しかし、全員にお知らせすることはとうてい不可能な状態でした。皆さんにもたいへん迷惑をおかけしたことをお詫びします。

あの、巨大な津波に何もかも飲み込まれる映像に加え、放射能の恐怖にさらされて、私たちにとっても何ヶ月も、証言集会の再開をどうするかということ、考えられる状態ではありませんでした。

その後、5月に入って絵鳩さんから、これを読んでみてくれませんか、といわれて文章を見せて頂きました。見出しには、「東日本大震災の復興に望む一前車の轍を踏むなかれ」、と書いてありました。

なぜならば、「関東大震災の復興の道は戦争の道であった」と書かれてあって、それに続いて、「前車の轍を踏むなかれ」と書かれていたのです。

絵鳩さんは関東大震災も経験されています。絵鳩さんの自らの体験からの実感のこもった忠告であります。大震災の復興を戦争への道を掃き清めるための手段にしようとしている、たしかに歴史をふり返るまでもなく、気がついたときには、もう戦争が始まっていた、という話を聞いたことがあります。戦火を交えるという意味での戦争までは行かないまでも、気がついたときはもう引き返すことのできない所に来てしまっていた、これがあの戦争の最大の教訓ではなかったのでしょうか。

この絵鳩さんの文章を見て、これこそが私たちにとっていま考えるべきことだと思います。そして今日の集会を準備してくれているスタッフたちと相談したところ「ぜひやろう！」ということで、7月24日に第10回神奈川証言集会を開催するまでにこぎつけました。

そのときには参加者みなさんに、絵鳩さんの「東日本大震災の復興に望む」という文章を「神奈川支部情報第 21 号」として配布しました。本日は、前回参加できなかった方もおられると思いますが、皆さんに行きわたる分の準備をしてきませんでした。

また、同じ前回の証言集会で講演して頂いた藤田先生の講演内容を収録した神奈川支部情報第 22 号もようやく整理ができました。ですが、今日の資料としての準備には間に合いませんでした。藤田先生の話も、歴史認識として「加害の事実」を認識しなければならないことを丁寧に説明されました。そして、第 5 福竜丸の経験から福島原発事故にいたる核に関する危険性を、横須賀に寄港している原子力艦船の具体的な現実から明らかにして頂きました。私たちもあらためて認識をさせられました。

受付に、この二つの情報は、見本程度においてあります。読んでみたいと思われる方は受付名簿に「情報希望」と書き添えておいて下さい。後ほどお送りします。

今日のために用意した資料は、じつは 3 月の時点で準備したのですが、昨年 11 月にこのかながわ県民センターのホールで、森達也さんに来て頂いて絵鳩さんとの共演で、盛大な集会を開催しました。そのときの絵鳩さんの証言を収録したものを配布させて頂きました。後ほどじっくりとお読み頂きたいと思います。

今日の絵鳩さんのお話です。

絵鳩さんは戦争で 4 年、シベリア抑留で 5 年、そして戦犯として撫順戦犯管理所で 6 年間、28 才で軍隊にとられて、帰国したのが 43 才でした。人生のど真ん中の貴重な 15 年間でした。絵鳩さんはこの 15 年間を手記で「棒にふった」と書かれています。また同時に「せめて最後の 6 年を撫順戦犯管理所で過ごせたことは「何ものにも代えがたい貴重な経験であった」、さらには「幸福であった」とも書かれています。

この 15 年間に絵鳩さんの体験については、私たちは何回もきくことができました。いつも感動させられています。今日の参加者の方々もそうだと思います。

また、戦争、シベリア抑留、撫順戦犯管理所については絵鳩さんの膨大な手記のなかから 3 部作の冊子を発行しました。今日、3 部作の最後の発行となる「皇軍兵士の 4 年」を発刊しました。発刊の順序は絵鳩さんの体験の順序とは逆でした。しかし、発刊に当たってはこの順序が正しいのだと思います。

皆さんも、発刊の順序にしたがって読んで頂くことが、本当の理解が深まることになると思います。

今日発刊した「皇軍兵士の4年」をぜひ読んで頂きたいと思います。初めての方で、3部作をまとめて買われる方には、1部400円ですが、1セットで1000円と大サービスで販売しています。後ろで売っています。どうぞ皆さん、読んで頂きたいと思います。今回の第3作目は、絵鳩さんの貴重な写真なども提供して頂いて掲載していることも紹介しておきます。

ところで、今日の絵鳩さんのお話は、この15年間の話ではありません。この15年間に関するお話しを期待されている方には、もしかすると多少は期待に背くお話になるかも知れません。ですが、ぜひ聞いていただきたいのです。

絵鳩さんはつねづね仰っています。「中国での侵略戦争に参加したこと、そして中国人民を蹂躪してきたことの、このことの真の反省を示すのは帰国後の生き方だよ」と。たしかに撫順戦犯管理所で学んでこられたことを実践するのは、鬼が人間に生まれ変わったことを、事実を持って証明するのは、帰国後のことであります。

これまでの神奈川証言集会で、絵鳩さんと一緒に撫順戦犯管理所を体験された高橋哲郎さんの仰っていたことが私にはたいへん印象的です。

たしかに撫順戦犯管理所では考えられもしなかった厚遇を受けて、戦争中に中国人民に対して犯してきた罪行をこころから反省して、これからは「日中友好、反戦平和」に生きる、と決意して帰国後生き抜いてきた。しかし今考えてみれば、戦犯管理所を出たときの反省は、半分でしかなかった。ということでありました。

なぜなら、帰国後の公安警察につけまわされたり、仕事にも就けない厳しい生活の中にも、そのうちに撫順戦犯管理所での体験を経たそれぞれのメンバーが結婚して、子供が生まれて、その子供が成長していく過程で、自分にとって子供はこんなにかわいいものか、家族はこんなに愛おしいものかということを実感するにつけて、中国であのとき自分がとった行動は何だったのかを考えないわけにはいかなかったのです。

こうして、帰国後の生活の中ではじめて実感してきたことの大切さを、今もお元気に証言して下さる高橋さんは語って下さいました。神奈川証言集会で語って下さった金子安治さんや小山一郎さんたちも語って下さいました。この二人は昨年相次いで亡くなりました。残念です。

今日は絵鳩さんに帰国後の 55 年間について、たっぷりとお話しをして頂きます。今年の初め、震災前に何回か集会の打ち合わせを兼ねて、絵鳩さんからお話しを聞く機会がありました。その際にこんなことを話してくださいました。

「最近は、いつの機会にも皆さんが僕の話真剣に聞いてくださっているの、僕にとっての長い人生の中で、今はたいへん充実しているのです」と。

帰国後の絵鳩さんに生き方こそが、撫順戦犯管理所で体験してきたことの真実を証明しているのがあります。後ほど絵鳩さんからお話しがありますが、戦後 11 年も経って、ようやく帰国してどんな境遇に見まわれたのか。絵鳩さんは、自分は比較的幸運だったと仰っておられますが、どんなご苦勞があったのか、その苦勞の中でどのような生き方をされてこられたのか、最後までしっかりと聞いて頂きたいと思います。

本日、解説して頂く張先生、石田先生のお二人について一言だけ付け加えさせて頂きます。中帰連のことを研究されている研究者としては第一人者だと私は判断しています。受け継ぐ会神奈川支部の会員でもありますが、会員と言うより神奈川支部にとっての先生、であります。いつも貴重な指導をして頂いています。

お二人は名コンビで、今も生存しておられる中帰連の方々を全国回って訪ね歩いて証言の聞き取り調査を行っておられます。明治学院大学平和研究会発行の機関誌や、「戦争責任」という雑誌や、今日一部受付にあります 9 条連の機関紙にも論文を掲載しています。

9 月には中国各地を回って、戦犯管理所で戦犯たちを指導された管理所の職員たちをたずね歩いて証言を集めてこられました。いずれの方たちもご高齢で、残っている人はごくわずかとなりました。これらの報告は近々、各種論文などで報告されると思います。

私も、お二人の聞き取り活動に、撫順戦犯管理所の部分だけを同行させて頂きました。貴重な体験をさせて頂きました。何らかの機会に報告したいと考えています。

お二人からも、大切な解説が行われます。付け加えて最後までよろしくお願い致します。